慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロシアとアメリカ合衆国
Sub Title	Pitirim A. Sorokin: "Russia and the United States," 1950 (pp 213)
Author	加藤, 寛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.4 (1953. 4) ,p.310(90)- 314(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19530401-0090
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19530401-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介

ロシアとアメリカ合衆國

Pitirim A. Sorokin;
"Russia and the United States;"
1950.　(pp. 213)

加藤寛

一

ロシアとアメリカとの對立が今日程強く響く時はない。そして兩國がどのような民族文化を保持しているかも重要な兩國對立の鍵をにぎるものとして知られねばならないものである。ここに紹介を試みるソロキンの著作もまたそのような關心のもとに書かれたものであつた。ソロキンは一八八九年から一九二二年迄をロシアに過し、その間社會學教授・新聞編集などをやつて、最近三六年間はアメリカに住み社會學者としては有名である。その經歷から見れば、兩國を比較するのに適した人物といえよう。彼はこの本で兩國の共通點を指摘しようとする。結論を急ぐあまりともすると安易さをまぬがれないが、その企圖はまことに注目すべきであろう。この著の初版は一九四四年に出版されたが、ここに紹介するのは一九五〇年訂正されて刊行されたものである。訂正の大きなものは第一〇章「ロシア・アメリカ衝突の眞の原因」の追加である。その他は初版と主旨は變更ないが若干の訂正がなされている。また標題は「ロシアとアメリカ」となつているが、この本がアメリカ人に讀ませるためである關係から、アメリカについては簡單な説明しかない。この紹介でもアメリカについては餘りふれずロシアの中にアメリカの類似點を見出そうとする著者の意圖にしたがつた。

二

先ずロシアの社會制度をみることにしよう。そしてそれが民主々義であるかないかは讀者の考えにまかせたい。何故ならデモクラシーという言葉は非常に漠然として使われ、はつきりした定義をもつていないからである。

家族――家族の基礎となる婦人はロシアにおいてどんな地位にいるであろうか。一般に革命後ロシアにおいては急速に婦人が進出し男子と變らざる地位で活躍するようになつたと信じられている。しかしそれは誤まつている。ロシアの長い歴史をみれば婦人の地位は革命前から高かつたことに氣がつくにちがいない。例えば Decembrists（牧師）の多くの妻。彼女らは宗教的又は政治的自由のための種々な鬪爭に指導的役割を果たした。或は Nadezhda Durova のようにナポレオンに對して一八一二年の戰いに英雄的行動をした人もいる。更には、有名な Sophia Kovalevskaia という數學者。その他あらゆる分野に女性の活躍をあげることができるのである。大學教授としてのたくさんの婦人、工場などにおける同樣の事實。これらのことは、ロシア婦人が既に革命以前、アメリカと同樣に重要な役割を果たしていたという實例である。又試みに村で行われる會合に出席すれば、婦人の少なからざる人々が議論に加わつていることに氣づくであろう。言うなればロシアの革命は革命以前になしていた所に、より以上の何ものもつけ加えていないのである。

次に結婚はどうであろうか。ロシア種族の間にかなりあつた一夫多妻は、一九世紀のキリスト教導入の後に急速になくなつていつた。又、結婚に際しての自由なる同意は古くからあつたし、ペーター大帝によつて法律化されていた。三番目に注意すべきことは、ロシア人と非ロシア人及び、ロシア正教とローマカトリック、プロテスタント及びその他の宗教の人たちとの結婚は許されていた。ただ、ロシア正教派の人と、非クリスチャンとの結婚は禁ぜられていた。しかしプロテスタントのような非正教派の人は、マホメット人やユダヤ人との結婚を許されていた。これらの禁止はヨーロッパの國々では普通でありロシアよりは嚴しかつた。廿世紀迄にはこれらの禁止も破棄されたのである。第四に離婚については、西歐ほど多くなかつたが、西歐以上に廣範に法律によつて許されていた。而もこの場合の妻の權利は夫の權利と同一であつた。最後に人格と財産の權利についてもロシアの法律は常に完全なる平等を主張しているし、實際においてもそうであつた。以上に述べたようなことは、親子の關係においてもそうであつて、法律上にも實際的にも自然であり、道德的であり社會的である。

地方的自治――若し我々がロシア革命前の地方的自治をみると本質的にその制度のデモクラティックな性格に氣づくだろう。農民自治からみてみよう。これは、一八六一年の農奴制廢止の後、ミールとオブシチナの二〇世紀における廢止以前、農民が一般に市民と同じ足場を得たとき、農民自身の事件（知事や代議員の選擧も勿論）を、ニューイングランドのタウンホールデモクラシー（town-hall democracy）の組織と同じように、村や町で開かれる會議の方法によつて解決したことに始まる。この組織のデモクラティックな性格は表面よりも奥に深くかくされていた。ミールとオブシチナとは政治單位ばかりでなく經濟的集團をあらわしていた。又この集團は家族的でもあつた。家を建てることを望む人には隣人がお手傳をするし、葬式をお互にするし、共同で建てた學校ももつていたのである。革命前のロシア協同運動の發展はここに基盤をもつていたのであつた。更にこのような組織はゼムストボとして都會にもあつたことがしられている。これらの組織は經濟的に文化的に大きな役割をもつていたのだが、不幸にもボルシェヴィキ革命後、共産黨の獨裁的官僚政府によつて變えられてしまつた。

ではロシアの中央政府の組織はどうであつたろうか。Novgord や Pskov のような君主たちはヴェッチェとよばれる大衆

の寄合組織を作つていた。他の君主たちも徹底的な君主制でも貴族制でもなく、重要な問題はヴェッチェによつて決定していた。ツアーの Muscovy 時代でさえ、ツアーの權力は絶對的ではなかつた。法律によつて制限されていたからである。Muscovy ツアーのあらゆる重要なる宣言、政府決定は二つの代議政體に承認されねばならなかつた。それは Zemsky Sobor と Boyarskaia Duma である。前者は自由な階層の一般的な議會である。言わばイギリスの Parliament やフランスの Etats Generaux に類似している。後者は樞密院とも言うべきものである。このようにロシアは民主的歐洲諸國家に似ていたのであり、兩者の差異は、ロシアの政體の法文化が歐洲諸國家に少々おくれたということだけである。

所で我々はとかくロシアを典型的な共産主義國と考え、アメリカを純粋に資本主義國と見易いのであるが、これに對してソロキンは嚴重な忠告をする。すなわち、もし今日のロシアが革命當時――特に一九一八―二二年――のロシアであるなら、アメリカもまた一九二〇―二九年（大恐慌以前）に位置することになるであろう。兩者の國がそれぞれ變化していることを忘れてはならない。そこで充分にロシア革命に起つたことがらと、以後二〇年間におこつたことがらとをみてみよう。

たくさんの革命を仔細に調査してみると、革命によつて永遠に破壞されるものは、革命が起らなくてもまさに亡びようとしており、氣息えんえんたる制度であることが判る。そして、生命ある制度はたとえ一度は革命思想に反するとして沫殺されてもそれは一時的にすぎないものである。このことはロシア革命にとつてもまた例外ではあり得ない。革命當初廢止された多くのものは、今やよみがえつているではないか。そして革命當時作られた僞の制度は亡び行く。生命のあつた社會文化的價値は一時否定されたが再びその地位を得ているのである。こういう實例は非常に多いのでここでは數種の典型的例のみをあげよう。

ここでソロキンは第一に結婚と宗教との問題をあげる。前者は、結婚と離婚を自由にすることによつて、既にプラトンの共産國家婚姻論についてアリストテレスが非難したことを再現した革命指導者の愚擧である。婦女子の不安定な生活を守るために扶養料を法律化したが逆にこれは夫であり父である男の生活を不具化してしまつた。漸次な訂正のうちに遂に今では正反對なものに發展した。又、宗教は最初迫害されたが現在では寛容になつている。自由についても同じ傾向にある。言論・出版・集會の自由は革命當初嚴しくとりしまられていたが、現在では相當な批判書の出版も許している。當初共産主義に關係する仕事のみに自由であつたのが最近では無關係の仕事も自由に許可している。これについては、ソ連側からは當然自由にしてもよい程ソ連社會主義が鞏固になつたのだという意見も考えられるのであるが、他のすべてにそうであるようにソロキンはそれらの豫想し得る批判には答えない。次に面白いのはロシア文化を

罵倒することから讃美することへの轉換である。革命當初は、プーシキン、トルストイ、ドストエフスキーの著作ですらも出版禁止目錄の中に入つていたのである。現在どうであるかはこれも我々には說明を要しない。これらのことはロシア人心理の基礎的な變化を意味する。革命當初の階級的憎惡が過ぎ去り、「プロレタリア萬歲！」「國際共産主義」とかいう言葉が忘れられ、國民的統一として愛國主義、母國が復活したのである。赤軍は國民軍に變貌している。又共産主義獨裁から民族デモクラシーへ、そして再び戰爭獨裁へ。戰時經濟となるとアメリカと殆んど差をつけられないし、生産手段の所有に關しても、アメリカの連合組織と重大な差とはならないであろう。ただ農業だけは重大な差異をもつている。しかし集團農場の管理は民主的で、役員は選擧され、計畫や文化活動などの問題は充分に全員によつて討議される。ただこのことは結局古いロシア農場の現代版にすぎない。革命によつては何も得られていないのである。すなわち前にあげたミールとオブシチナの現代版であり革命前のロシアの進行である。要するに以上を綜合するとロシア革命によつて何ものも變革されていない。古版ロシアの再現であるか、あるいは計畫經濟にしても、英・米に既に起つている公團・公社の組織と質の異なるものではないのである。

さて以上のような分析の上で彼は、いささか時事的な問題ではあるが、アメリカとソ連と衝突する原因がどこにあるかを問題にする。最もありふれた理論では兩者の爭いが、イデオロギーの相異であるとか、政治的・社會的・經濟的制度の差違であるとか言われる。唯物辨證法對キリスト教、國有經濟對自由企業、共産主義對資本主義、獨裁制對選擧民主制、個人及び個人の自由の壓迫對個人の尊重などなどお互に調和する可能性は全くないとするのである。だがこのような問題の對立に共通な地盤を見つけだしたのがソロキンの仕事であつた。從てソロキンにとつてはこれらの對立は眞の對立ではない。表面的なものである。それでは兩者の衝突する眞の原因は奈邊にあるであろうか。

ソロキンによれば戰爭とか革命とかは文化の支配的體系の分裂によつて特長づけられる時期に急迫をつげる傾向がある。第一次世界大戰、ロシア革命、ファシスト革命、第二次世界大戰。これらの四事件いずれも文化秩序の分裂を示すものである。そしてそれは引きつづいて現代西洋の疾患である。從てその分裂の統合は何もロシアとアメリカによつて代表されなくてもいいのであるが、いずれにせよ最も強大なる二對立が必要であり、それがロシア對アメリカの對立となつたのである。そこで兩國の眞の對立は、兩國の善惡にはなく、兩者のその強大なる力が危機を脱し得るであろうという特權にあるのである。だからロシアがたとえツアー制であろうと、民主制であろうと、他のどんな制度であろうと、アメリカとの對立は生ずるであろう。この解決は疾患が全人類の協力を必要とすることに氣づかねばならないのである。

三

以上ソロキンは自己の社會學的基盤に立つてアメリカとロシアとが決して對立すべきものでないことを論ずるのであるが、私はこの大家に敬意を表しつつも若干の疑念を禁じ得ない。ソロキンは、兩國の社會制度などを述べ大差ないと斷定するのであるが、その見方は兩者の類似點のみを指摘して少しもその內容に考察をめぐらさない。個々にバラバラにとりあげて見た內容からいえば差は程度の問題かもしれないが、このような安易な分析は皮相的の感をまぬかれない。社會制度の重要性は個々の現象を指摘するのみでは不充分である。個々の現象を體系づけている原理を見なければ現象の異同を判定することはできない。ソロキンは類似を指摘するに性急にして寬容であつた。又ソロキンは舊制度の復活と、そして社會の破り得ない流れを過信するの餘り、人間の目的に行動の意義を見失なつてしまう。このソロキンの價値的見方の不足が社會の秩序を基礎づける原理に考察をめぐらさせなかつたのであろう。